

G-SEC Newsletter

No.39 2015.5.25

2015年度の基本方針と活動計画について



竹中所長

駒村常任理事

駒村 圭吾 (慶應義塾常任理事・法学部教授)

竹中 平蔵 (慶應義塾大学G-SEC所長・総合政策学部教授)

武山 政直 (慶應義塾大学G-SEC副所長・経済学部教授)

田村 次朗 (慶應義塾大学G-SEC副所長・法学部教授)

青木 節子 (慶應義塾大学G-SEC副所長・総合政策学部教授)

G-SECの役割と今年度の活動計画

竹中 グローバルセキュリティ研究所(G-SEC)は、「世界に競争しうるユニークな複合領域の研究実施拠点」を目標に掲げ、大学に直属の研究所として設立され10年が経ちました。

学部・研究科に属さない、「全学共同利用の研究空間」、「プロジェクト型研究の研究拠点」であるG-SECは、幅広い領域の研究課題、研究者を受け入れる「寛容さ」を有しますが、反面、研究対象が広範になりすぎて、何を研究しているのかわかりにくいという批判を受けることも懸念されました。そこで、研究所に一つの求心力を持たせるため、コア・リサーチ・サブジェクトを設定し、体系的・戦略的に研究に取り組んできました。

大学に直属の研究所として、学内の知的リソースと学外の知的リソースを結び付けて社会に貢献する、つまり、学内外の結節点となることもG-SECの重要な役割の1つと認識しています。ファカルティの問題意識を束ねるセミナー、学内外の研究者・専門家によるディスカッションを通して、慶應義塾発のウォーニングに繋げることを試みるセミナー、年次

基本方針

1. 研究・教育・人材育成については、これまでの成果を踏襲してさらなる発展をめざす。
2. 慶應義塾大学と社会との結節点としての役割をいっそう充実する。
3. 研究成果等を社会へ発信し、共有するために、出版、Web広報、セミナーを強化する。

重点課題

- ・学内外識者によるDialogueを学生に公開する。
- ・様々な検証作業を行い、成果を広く社会と共有する。

グローバルセキュリティ研究所2015年度事業計画より

コンファレンスを開催すると共に、書籍にまとめて出版することにも力を入れてきました。

また、研究と教育は表裏一体をなすべきものだという考えから、研究所に教育の機能を取り入れ、外部資金で運営する寄附講座を開講してきました。

これまでの活動・成果を踏まえて、よりいっそうの充実を図ることを目指して、今年度の基本方針と重点課題を設定しましたが、それぞれの担当分野について、具体的に触れていきたいと思います。



<特集> 2015年度の基本方針と活動計画について
開催報告 G-SEC Faculty Seminar 第21回

Dialogueと検証

竹 中 重点課題に「Dialogue」と「検証」を掲げましたが、慶應には、国際関係や経済問題など、今日の重要な課題の第一人者で、テレビやカンファレンス等で活躍されている研究者が多数おられますが、その方たちが慶應の中で議論されることは極めて少ないと感じています。これは、研究者、学生双方にとって非常にもったいないことです。塾内の研究者にお願いをして、「Security」「geo-politics」「geo-economics」に焦点を当て、「G-SEC Dialogue」というような形で、学生が直に聞き、感じ取り、意見を述べる、そのような機会を提供できればと考えています。

成熟した市民社会では、物事が起こったとき、特に政策の観点から、一体何が良かったのか、悪かったのか、それを今後どのように反映していくかということを実に議論する「検証」が定着してきています。日本ではなかなかできていないのが事実ですが、G-SECとして検証をしっかりと行い、検証結果を社会と共有し、活用いただこうというものです。

田 村 東日本大震災の復旧・復興に携わったリーダーにお集まりいただき、大規模災害発生後の復旧、復興支援を課題として取り組んできた「復興リーダー会議」は、昨年、第3期をもって終了しました。そこで練りあげられた提言やアクションプランは、現場での実体験に基づく貴重な記録といえます。

今年度からはWebサイトを活用した活動に移行しますが、「復興リーダー会議」の成果に加え、協力いただいた会議委員の経験談や、提言やアクションプランに対する追加情報なども掲載し、委員間のネットワークのハブとして充実させ、社会と共有することを具体化したいと思います。

地震、津波等による大規模災害は今後も起きうること、日本だけでなく世界中からアクセスいただけるWebサイトにしていきたいと考えています。

新たな脅威への備え

青 木 我々の研究グループは、自然発生的な感染症やバイオテロに備えるための事前準備についての研究を行ってきました。昨年の西アフリカにおけるエボラ出血熱の流行は世界を震撼させましたが、バイオテロについて、ニュースで取り沙汰されることもあり、その重要性は今後さらに高まると思われます。



青木副所長

武山副所長

田村副所長

今年度は、それらの脅威に備えるための事前準備について研究を行うだけではなく、直接、政策に結びつけるための情報発信およびネットワークの構築に力を入れたいと考えています。

竹 中 青木先生の研究グループの活動により、世界のバイオセキュリティ研究ネットワークにおいて、日本の拠点としてG-SECが位置づけられていることは、特筆すべき成果といえます。

新たな脅威という観点から忘れてはならないキーワードが「インターネット」です。G-SECでは土屋大洋教授（政策・メディア研究科）が、サイバーセキュリティ分野の研究を続けておられ、国内外の研究者と太いパイプを作られています。昨年、インターネットガバナンスに関する研究グループがG-SECを拠点として活動を始め、教育プログラム作りも視野にあると伺っています。

グローバルリーダーの育成

田 村 教育の話が出ましたので触れさせていただきますと、私はG-SECではリーダーシップをテーマに取り組んでいますが、リーダーシップ論とかリーダーシップ教育という言葉はあっても、しっかりとした教育プログラムが日本には存在しないので、それを作り上げたいと考えています。

Faculty Seminarでは、海外でリーダーシップ教育やそのプログラム作り実際に携わった方を講師にお招きして、ファカルティメンバーとリーダーシップ教育について議論を交わしていく計画です。また、お呼びした講師を核にネットワークを広げ、海外のリーダーシップ教育の最前線に携わる方を講師とするセミナーを継続的に開催したいと考えています。

竹中 田村先生のご指摘のように、グローバルリーダーの育成は、日本の最重要課題の1つですが、なかなかできていないことだと思います。今年はFaculty Seminarと研究プロジェクトで基礎固めをして、来年度に寄附講座を開講することを目指してはいかがでしょうか。その成果を書籍化して、より多くの方と共有していく。わが国の将来のために、ぜひ取り組んでいただきたいことです。

田村 海外で、現実にリーダーシップ教育をやってきた方にアクティブ・ラーニングをやってもらい、こういうものがリーダーシップ教育だということを実践して、グローバルリーダーの育成につながる、しっかりとしたプログラム作りにつなげていきたいと考えています。

コミュニティとイノベーション

武山 今年度は、企業との共同研究で、サービス利用者（生活者）の体験価値を重視してサービス全体を設計する“サービスデザイン”の手法やプロセスの開発、自治体との共同研究で、地域コミュニティのイノベーションという、いずれも「生活者」を主体とする課題を中心に取り組む計画です。

いずれも昨年度からの継続ですが、後者は、これまでの実績を踏まえ、地域をつなぐ交流の場づくり、町会・自治会等の地域コミュニティを活性化するために活躍できるような人と人、組織と組織をつなぐ役割を果たす人材を発掘し養成するため、専任の研究員を配置して調査研究を進めながら、講座を開講し運営します。セミナーに加え、公開シンポジウムなどで成果を積み上げていきたいと考えています。

竹中 コミュニティはすごく重要です。都会のコミュニティの再構築ですね。今、地方創生の観点で各市町村は基本計画を作成しているところですが、港区は大規模マンションも増え、新たなコミュニティも生まれてきます。

武山 高層マンションという全く新しいコミュニティに着目しています。デベロッパーもコミュニティの魅力を生み出す必要性を認識し始めています。コミュニティは震災等の災害時に、再生の原動力にもなります。理事会運営などは管理会社任せになっているところが多く、イノベーションの可能性を秘めていると思います。住む空間だけでなく、コ

ミュニティをつくっていきけるソフト面も含めた研究に取り組み、その研究成果がビジネスにつながる、大学の研究成果を社会の発展に直結できる分野だと考えています。

大学に直属する開かれた研究所として

駒村 最初に竹中所長が述べられたように、G-SECは学部・研究科に属さない、大学に直属する組織として設立された経緯もあり、慶應の中でも最も学際的であり、外部に開かれている組織と考えています。

G-SECが拠点を置く三田キャンパスの学部・研究科は、日本を支える人材を数多く輩出し、伝統と実績により社会から高い評価を受けています。一方で、伝統と実績が、教員・研究者を自身の学問領域から一歩踏み出す際の足かせとなっているようなケースも散見されます。

昨年からは義塾では、「超成熟社会の持続的発展」の統合課題の下、「Longevity（長寿）」「Creativity（創造）」「Security（安全）」の3つのクラスターをつくり、スーパーグローバル事業を推進しています。それぞれのクラスターが成果を挙げるとともに、それらが連携、融合することで、より高度な成果を創出することが可能となります。3つのクラスター長によるワークショップをG-SECで開催するなど、G-SECがクラスターの連携と融合の触媒となることにより、より高い成果創出に貢献できるのではないのでしょうか。

G-SECは、設立10年の塾内では若い組織ですが、設立当初より学際的な研究が行われています。既成の枠にとらわれない、世の中の課題を先取りした視点から研究プロジェクトを企画し、塾内の組織に横串を刺し、義塾の新たな知の活性化を図り、義塾の今後のグローバル化を先導する心意気で取り組んでいただきたいと思っています。

竹中 今年度のG-SECは、国際社会の中の研究拠点づくり、人材育成、地域活性化と、幅広い領域の研究プロジェクトが活動します。その成果を社会と共有し、慶應義塾大学のシンクタンクとして、世界から認められる研究所を目指したいと思っています。

（所内運営委員会記録等を参考に、事務局にて起稿）

【開催報告】G-SEC Faculty Seminar 第21回

「創業340年、酒蔵に受け継がれる伝統・本物の酒造り」



講師：寺田 優氏 株式会社寺田本家 代表取締役

寺田本家は、創業340年を数える、日本を代表する老舗企業です。代表取締役の寺田優氏をお招きして、自然酒造りのみにこだわり、本物のお酒を醸すことで社会に貢献することを考え、発酵する企業文化を引き継ぐ様子をご紹介いただきました。

コーディネーター：田村 次朗 (G-SEC副所長・法学部教授)

日時：2014年11月27日 (木) 18:30～20:00

会場：慶應義塾大学 三田キャンパス 東館6階 G-SEC Lab

寺田氏は創業340年を数える酒造の24代目で、寺田本家は、23代目が自然酒造りを始めて経営が好転した。以来、酒造の「発酵屋」としての役割を重視して、人と発酵との関わり合いである発酵文化を広く伝えることに取り組み、また、経営においては、売手よし・買手よし・世間よし・神様よしの「四方よしの経営」を心がけてきた。

具体的な取り組みとしては、発酵文化を広めるための商品開発や、地域で一体となって発酵をテーマに町おこしをし、海外の自然食品イベントで商品の紹介などを行っている。そのなかでも、酒造りは地域あつてのものという意識か

ら、発酵を通して地域にどのように貢献できるかという視点は常に意識してきた。「四方よしの経営」のためには、会社を大きくしようとしないうことを大切にしている。皆が美味しいと思えるものを追い求めずに、100人に1人が好むお酒を造ることを目指し、できる範囲の事を楽しみながら全力を尽くすことで、長く続けることに繋がっている。

発酵文化を伝えるという意識が新たな価値を創造し、地に足を付けた経営が根を強くする、この二つが会社の好循環を生みだしている。

【開催予告】G-SEC Faculty Seminar

「交渉学のすすめ —リーダーの決断—」

第22回 日時：2015年6月5日 (金) 18:30～20:00 (開場 18:00)

テーマ：「リーダーシップ教育の最前線 —リーダーシップは学ぶことができるか—」

講師：渡邊 竜介氏 (山梨学院大学国際部長、ハーバード大学元研究員)

第23回 日時：2015年7月7日 (火) 18:30～20:00 (開場 18:00)

講師：鎌田華乃子氏 (コミュニティ・オーガナイズング・ジャパン代表)

会場：慶應義塾大学 三田キャンパス 東館6階G-SEC Lab

コーディネーター：田村 次朗 (G-SEC副所長・法学部教授)